

近世日朝関係と江戸幕府・対馬宗家

古川, 祐貴

<https://hdl.handle.net/2324/4475220>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名	古川 祐貴			
論 文 名	近世日朝関係と江戸幕府・対馬宗家			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	岩崎 義則
	副 査	九州大学	教授	佐伯 弘次
	副 査	九州大学	講師	国分 航士
	副 査	九州大学	教授	森平 雅彦

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、17世紀後半～18世紀初頭における対馬宗家による江戸幕府に対する請願行為（対幕府交渉）を、日本・韓国に伝来する膨大な宗家文書を用いて実証的に検討した。

第1章では、徳川将軍の国書・別幅が、足利将軍や豊臣秀吉の先例を踏襲したものであり、それらが改変を加えられないまま幕末期に至ったことを解明した。これに関連した補論1では、徳川将軍の外交印について、網羅的な検討を行い、附録1では、近世日朝間で交換された全ての国書・別幅を提示した。

第2章では、17世紀後半～18世紀初頭、一時的に設けられた「朝鮮御用老中」が宗家にとって有益な存在ではあったものの、幕府の朝鮮通交に対する認識は「無知・無関心」との評価を行った。

第3章と第4章では、当該期の宗家の家督と「家業」（あるいは「家役」）としての朝鮮通交の継承を検討した（他の大名家ではみられない特異な事例である）。即ち、両者が同時になされていな事例においては、背景として竹島問題などの対外的な危機が想定され、こうした事例の存在が、幕府に朝鮮通交の重要性を訴える手段として機能したことを解明した。さらに、宗家による幕府への起請文提出が、朝鮮通交を継承したことを象徴する行為であることを示した。

第5章では、当該期の図書受領システムの改変が、結果的に、朝鮮通交に対する幕府の関与を強め、さらに、朝鮮通交が幕府の命令を前提として成り立つとする宗家の主張を後押ししたと論じた。関連した附録2において、江戸時代の図書を網羅的に提示した。

第6章～第8章では、当該期における拝借金や朝鮮通信使の費用請願をとりあげた。その中で、宗家の自己認識である「藩屏」概念の初出とこれが使われた背景・社会状況を考察した。また、宗家が、朝鮮通信使をめぐる役儀と、外国に対する「外聞」を一致させたことで、幕府からの費用獲得を正当化したことを明らかにした。さらに、新井白石・雨森芳洲の論争の前哨ともなった白石に対する請願を分析し、初めて「朝鮮之押」という宗家の自己認識が出現していたことを解明した。

以上の通り、本論文は、従来、曖昧であった朝鮮通交に関する幕府と宗家の関係をめぐる貴重な基礎研究であり、豊富な調査データとともに、その意義付けは今後の日朝関係史に大きく寄与するものであると期待できる。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）授与されるのに、十分な能力を有することを認めるものである。